

[第2回]

“本気”のスピリット

その辛口の発言は、終始一貫。「1980年代は雑音とされていたけれど、最近では私の言っていることはどうも本当らしいと、耳を貸してくれるようになってきましたね」と黒川清氏。

率先して、開かれた医学教育の実践にも取り組む。ひとえに今の世代の、次代への責任として。

ゲスト

黒川 清 *Kurokawa Kiyoshi*

東海大学教授・東海大学総合医学研究所長



ききて

養老孟司 *Yoro Takeshi*

解剖学者・北里大学教授



黒川 清

1936年、東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了。ペンシルバニア大学医学部生化学助手、カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部内科助教授、準教授を経て、1979年同教授。1983年東京大学医学部第四内科助教授として日本に帰国。米国の医学教育を熟知し、外へ開かれた医学教育を実践。1989年東京大学医学部第一内科教授、その後東大を定年前に辞し、1996年東海大学教授、医学部長になる。1997年に東京大学名誉教授。2002年から現職。著書は『医学生のお勉強』、『医を語る』など多数。

歴史に連なる“サムライ精神”

黒川 私は最近、日本の由来というか、考え方の由来を知りたいと思って、いろいろな本を読んでいると、みんなにも薦めたくなるんですよ(笑)。

養老 たとえばどんな本ですか。

黒川 すでに名著といわれているルース・ベネディクトの『菊と刀』とか、最近では池上英子さんの『名誉と順応』。それから大戦の敗北を日本軍の組織の観点からとらえた『失敗の本質』とか、『菊と刀』は、ご存じのように、米軍が社会学者のベネディクトに日本研究をまとめさせたものです。第2次世界大戦中、米軍はヨーロッパの戦争の歴史から対日戦略を考えるけれども、日本軍には戦略の常識が通じない。敗北が目に見えている戦闘でも、降参しないで反撃してくる。最後に手を挙げて出てきた10人を捕まえてみれば、すでに500人、1,000人死んでいるような状況です。あれだけ普通の人まで巻き込んで死んでいく日本には、何かよほど強い信念があるに違いないと。そこで、まず、日本人はどのような価値観で戦争をしているのかを知ろうとしたわけですね。

池上英子さんの著作は、日本人のこうした考え方を歴史社会学から分析しています。日本は実は1200年もサムライがコントロールしていた国であり、“サムライ精神”が日本社会の基本にあると。そして徳川の治世が続き、サムライの存在理由が薄れてくる江戸後期には、儒教をうまく取り入れる。儒教の教えの、ひとつの軸になる“忠”と“孝”の忠を強調することで、徳川の安泰を図るのです。自分の主君を敬いなさいと。そのころから日本人の脳には「忠が大事である」とインプリン

トされている。明治維新以後、さらに戦後の今になってもそれがなお続いているから、国のために死ぬとか、現代でも会社をクビになったら自殺するとかになるのでしょうか。

過去4年間で、自殺者がなんと平均3万人を超えているのですよ。増えた分は40代、50代、60代の男だけ。いったいなぜか。1つだけのヒエラルキーがなくなるとたんに、自分の存在基盤がなくなるからです。“自殺”、“過労死”、“天下り”。この3つが、日本人以外の人には理解できないでしょうね。“過労死”という言葉は、そのままオックスフォードの辞書にも載っている。そんなに仕事が好きなのか。そして、官僚が辞めれば“天下り”。これはdescend from heavenですよ。外国では、国家公務員はcivil servantとかpublic servant といって、servantなのだから。この3つの現象、考え方を日本人自身が「おかしい」と思わないかぎり、日本は変わらないでしょう。

養老 自分たちが“共同体”の暗黙のルールをフォローしているのだということを、意識化しないと変わらないでしょうね。

黒川 おもしろいことに、私は15年アメリカにいて、「あなたはどんなことをしているのか」と聞かれたことはあっても、1度も「あなたはどこの大学出身か」と聞かれたことがない。医者という職業人として、開業していようが研究していようが、病院に勤めようが大学の教授をしていようが、上下関係ではないからね。あくまでも“I”と“You”との関係なのだけれど、日本ではIとYouに関する日本語がたくさんあることに表れているように、どこに所属しているかが大事なのです。

養老 だから、僕はパーティーに出たくないのですよ。若いとき、「先生は何をし

ているのですか」と聞かれるのも困った。はっきりとした学者の出だったら、「腎臓をやっています」とかの対象を言わなくてはいけない。けれど、「私は方法をやっています」という学問がないのです。私は中華料理をとか、フランス料理をやっています、という答えならいいけれども、「私は包丁の使い方を勉強しています」というのはない。ところが、どの料理にも包丁はいるのです。だから、私が中華料理やフランス料理を作ったりしていると、「先生、なぜ本職は日本料理のはずなのに」(笑)と言われてしまうわけです。学問を細かく対象で分類するというのは、日本の特徴ですね。

ハイリスクに挑戦するスピリット

黒川 これからは、やはり次の世代が大事です。私は学生たちを、半年くらいの短期留学でどんどん外国に行かせているのです。学生の間は、いくらでも失敗ができる。そこで彼らのデューティーは、週に1回、私にEメールでレポートを出すこと。私も英語ですぐ返信するけれども、2、3週間で彼らの視野が広がってエキサイトしてくるのがわかる。これからの人には、いろいろな選択肢や価値観の違いがあることを教えてやりたいのです。日本の山は富士山がいちばん高く、大学教授なら3,000m、せめて2,500mはあると信じていた。けれど実際には1,000mしかなかったということがいくらもあるからです。雲に隠れていて見えない。だからそこを目指していると、卒業したころはせいぜい700mにしかならない。それが外国に行ってみると、実は5,000mの山も8,000mの山もあることに気づく。高いだけではなくて、1,700mでも谷川岳みたい

養老孟司

1937年鎌倉生まれ。東京大学大学院博士課程修了。インターンを経て解剖学教室に入り、後に医学部教授。研究のかたわら、文学的領域でも活動の場を広げてきた。1995年に退官、1996年北里大学教授。著書は『人間科学』、『都市主義の限界』、『唯脳論』、『自分の頭と身体で考える』(甲野善紀氏との共著)など、多数。



に険しい山や、3,000mでも緩やかな山もある。それぞれの山に存在の意味、存在の価値があると気づくようになるのです。するとお医者さんになったとき、自分は2,000mでもなだらかな山になろうとか、それぞれの目標設定ができるじゃないですか。富士山だけだと思っていると、将来のある人をつぶしてしまうことになるのです。

養老 見せて体験して選択肢を増やす。

黒川 そうするためには、わけもわからない偉い人が、自分の過去の限られた経験で知ったかぶりをすると、私は何度でも言う(笑)。今の銀行も「われわれは一生懸命やっている」と言うけれども、自分たちのこれまでの権益を侵される、権威を傷つけられることを恐れているだけです。

養老 日本というのは不思議な国で、こういう状況になっても銀行から金は逃げないのですよ。

黒川 スウェーデンでも1992年にバブルがはじけて、土地の価格が75%下がったのです。今の日本と同じです。けれど、そのとき即座に政策をとった。銀行預金は全額保証する。国民は安心して、取り付け騒ぎは起こらない。結果として、大銀行5行のうち3行はすぐにつぶれてしまった。でも、みんな預金は預けっ放しで、その後産業が復興する。結局、その処理に国はいくらお金を使ったと思いますか。ゼロですって。保証してただけ。スウェーデンの大学教授がその話をして、最後に「日本はスウェーデンの経験から

学ぶことがあるか」と言うので「イエス」。「日本は習おうとするか」と問われたので「ノー」と。

養老 わかっているのは、日本の銀行は本当は仕事がないことです。業界がだめになってくるのは、実質的には仕事がないからです。たとえばいま僕が銀行をやるといったら、やるけれども逆ざやにする。年利3%取り上げるよ。それは保管料だからって(笑)。それしかないもの。その預金を回してもうけるというのは、いま大変ですよ。前に、藤原正彦さんがこの対談で話しておられたけれど、アメリカの大手証券会社ではデリバティブなんかやろうと思ったら、専門の数学者を100人雇ってやっていると。今はそういう世界です。本気でやるなら金を集めて数学者雇って、徹底的に頭を使わせて、それで1分1秒を争って死ぬ思いで取引をやり、それでもうけなければもうからないのだから。それを日本の銀行みたいに甘い商売をしていたら、つぶれないほうがおかしいでしょう。

黒川 これまでは、一流大学に入り、官僚になるか銀行とかの安定大企業に就職する、ローリスク・ハイリターン的人生がいちばんという社会があった。それが日本のエリートです。次にローリスク・ローリターン、大企業の下請け。3番目はハイリスク・ローリターンで、中小企業と個人商店です。ところがアングロサクソンなどのエリートの一部は、ハイリスク・ハイリターンで、アドベンチャーをするのです。エリートのスピリットが違います。日

本のエリートは、ふだんは威張っていて、いざとなったら先に逃げる。アングロサクソンのエリートは、いざとなったら先頭に立つ。そういう人が世の中を変えていくエネルギーになるのです。

ですから、今の日本で、ローリスク・ハイリターンのポジションを辞めて、ハイリスクのポジションに移っていく若い人たちを、私は応援しています。彼らはこれからのドライビングフォースになりうる人たちですから。だから私は、しょっちゅう「出る杭を増やそう」と言っているんです。そして、出すぎた杭は打たれない、足元だけは気を付けて、と自戒の念をこめて(笑)。

池田小事件をどう考えるか

黒川 ノーベル賞の田中耕一さんが若いときに「常識の反対は何か」と聞かれて、普通は「非常識」と答えるところを「創造性です」と言ったという話があった。そういう返事をする人ぐらいしか、新しいことはできないでしょうね。理科の授業で「雪が溶けたら何になる」と聞いて、ある子が「春になる」と言ったら、みんなバカにします。そうではなくて、「お、それはすごいね」と教師も言わなくてははいけない。出る杭を育てなくては(笑)。

養老 そうしたことって、いろいろなところに気持ちが入っているかどうかの問題ですね。話を聞いていて思い出したのは池田小学校の事件です。教室に突然変なやつが入ってきて、7人も子どもが殺された。あれに関する報道が、僕は何か気に入らない。なぜこんなに腹が立つのかと自問してみたら、たった1枚の写真が記憶に焼きついている。犯人が警察に護衛されて、学校から出てくる写真です。それが不愉快の原因なのです。なぜ犯人が元気でピンピンして、お巡りさんに護送されていったのか。僕らの時代の学校だったら、犯人は担架に乗せられて出ていくのが当たり前なくらいです。先生は、親

に代わって子どもを預かっているのだから。子どもに対する感情的な共感があれば、「俺の子どもにこんなことをしやがって」と、後ろから行って犯人をぶん殴るようなことがあってもおかしくない事件でしょう。そこを推して考えていくと、「本気じゃないな」という答えが出てくるのです。先生は生徒をお客さんだと思っているし、その客のところにも別の招かざる客が乱入してきて殺人が起こった、くらいに思っているのではないか。教育をやっている先生方が、子どもとの距離がすではるかに離れてしまったのですよ。

黒川 それはいえると思います。

養老 それであとで慰霊祭をやった文部大臣が出るなんて、そんなことは関係ないのです。犯人はピンピンして刑務所に入って、国のお金で飯を食べているのだもの。それをおかしいと思っていないところがおかしいのです。これは瀋陽の事件と重なってしまう。本来、人間がもっている感情が、日本人のなかで生きて動いていない。「あ、犯人、とんでもないやつだ」と言って、気が短い人が途中で殴り殺してしまうようなことになってもおかしくない事件だったのですよ。僕はそれが異常だと思った。その後、各学校にビデオカメラを設置する云々、そんなことを決めて済む話ではないのです。

黒川 それは私もすごく感じていて、中教審でもそうです。ゆとり教育とかいって何をするかといえば、社会活動、社会奉仕。そういうことは親がやっているから子どもも自然にやるのであって、親ができないのは“ヒラメ人間”だからできないだけの話でしょう。「愛国心をもとう」とか言っても、政治家だって、だれがみたってあふれるような愛国心があるかなんかは明らかで、子どもは本能的にわかります。自分たちがやりもしないで、そんなことを教育しろだなんてね。まず大人がやってみせればいいのです。

養老 その根本は、子どもに対しての、その人の愛情ですよ。

黒川 そのとおりです。生徒は先生を写す鏡、子どもは社会を写す鏡です。

本気の人

養老 『からくり民主主義』という本に、いかに本気でないかという話が出てきます。青木ヶ原の樹海で、村の人が入っていったら、中から出てきた人がいました。「どうしたんですか」と聞くと「高い木の上で首をくくったら、枝が折れて落ちちた」と。つい「大丈夫ですか」と言ったら、「いやあ、びっくりした、死ぬかと思った」って(笑)。これが日本人だよ。自分は思いつめたつもりでも、枝が折れて落ちちてみれば……。本気ということがわからなくなっちゃっているんです。本気だったら、落ちちて「死ぬかと思った」という台詞は出ないはずですよ。この本には、そういう本気じゃない自己チューがたくさん出てきます。

黒川 結局、子どものときからみている周りの大人に、真剣に生きている人が少ないからです。真剣にやりもしないで、やらないのは教育のせいだなんて。失業率が20%を超えないと、日本は何も変わらないんじゃないでしょうか。飼いなされた子羊みたいに。司馬遼太郎はいろいろな人物を書いているけれども、彼が最後に書いたのは『坂の上の雲』の東郷平八郎の参謀、秋山真之兄弟でしょう。



黒川清
オフィシャルサイト
(<http://www.doctrina-md.com>)

その後、いっさい人物を中心にした物語は書いていない。調べていないのではなく、秋山真之兄弟以後に、後世の人に語るような本気の人がいないとわかったから、書くに忍びなかった。それでみんな紀行物語になっている。

吉田松陰は、29歳で死んでいます。彼のことを世界で初めて書いたのは、『宝島』(1883)を書いたスティーブソンなのです。明治時代にイギリスに留学し、東京職工学校(現在の東京工業大学)の初代校長になった正木退蔵から、「私は12~13歳のころ、こういう素晴らしい先生に会った」という話を聞いたスティーブソンが、それを題材にして、日本にはこういう優れたすごい人がいたという話を書いた。子ども心に、たった3カ月しか会わなかった吉田松陰が焼きついているのです。そういう本気の人が、今はいないんだな。リスクのあることは言わないし、やらない。本当はいいはずはないけれども、そこに行くまでの炎を、周りか一生懸命になって消している。

養老 だけど、大きくみれば、別に何も心配することはないんですよ、日本の将来についてなんて。50何年前は、東京も焼け野原だったもの。

黒川 そうだね、僕らはそれを経験している。長い歴史からいえば、たとえ日本がだめになっても、500年もすればまた上向くこともあるってね(笑)。●